

「天の使いに支えられて」

「ふるさとの山に向かひて言うことなし

ふるさとの山はありがたきかな」

盛岡市出身の石川啄木の有名な短歌です。

どの山を示しているのかは岩手山とも姫神山との説もあるそうですが、とても心に響きます。皆さんも故郷の山を見て日々の挨拶を交わしたり、出かけ先から戻ってきたときに故郷の山をみて「帰ってきたなあ」と実感することはないでしょうか。

私はこれまで東北教区各地の教会で奉仕させて頂いていますがどの地でも皆さんが大切にしている山がありました。聖書の詩編にも

「私は山々に向かって目を上げる。私の助けはどこから来るのか。私の助けは主のもとから天と地を造られた方のもとから。」(聖書協会共同訳 詩編 122:1-2) という信仰者の歌があります。

石川啄木といえば宮沢賢治に並ぶ岩手を代表する偉大な歌人です。

先日、ある方から啄木が亡くなる3週間前に実妹の光子に宛てた手紙について教えて頂く機会がありました。その内容は母を肺結核で亡くし、自身も東京で病床に伏しており、手紙自体は啄木の口述を友人が代筆したもので、母の最後の様子や、「俺へ手紙をよこす時用のないべらべらした文句を書くな」といった光子への小言が記されていたそうです。

また、啄木が上京して間もない時に光子に送った手紙についても紹介して頂きました。その頃は小説家を目指して上京したものの売れずに悩んでいた頃だったのもあり「兄さんはあんまりえらい為に、金持ちにもなれぬし、親孝行も出来ない。毎日毎日少しずつでもお母さんを慰めてくれ。そうでなかったら死ぬ」とも記しているのですよとの事でした。

妹の光子は1910年春から日本聖公会の婦人伝

道師養成学校であった聖使女学院で学び、

1922年には聖公会の司祭であった三浦清一氏と結婚され、日本聖公会神戸昇天教会の信徒として信仰生活を送られ、1968年に満80歳で逝去されました。(ウィキペディアより)

啄木が光子に送った手紙から私は人間味あふれる彼の今まで知らなかった側面を知ることが出来ました。そして啄木の短歌が生まれる背後にある出来事や支えた人物に思いを寄せながら冒頭の歌を改めて心に留めています。

主イエス様は荒野でサタンから誘惑を受けました。マルコによる福音書では「イエスは四十日間荒野にいて、サタンの試みを受け、また、野獣と共におられた。そして、天使たちがイエスに仕えていた。」(マルコ 1:13) と記しています。「野獣」とは何でしょうか。当然身を脅かす文字通りの野獣も荒野にいた

のかもしれませんが。さらにそれには人間の欲望、本能も意味するのかもしれませんが。マルコが記す主イエスの姿は人間イエスをはっきりと示します。人間味あふれる素朴な描写がマルコの特徴です。そして、「天使たちが仕えていた」のです。天使とは何かという事について一ついえることは神から遣わされたメッセンジャーという役割を持っています。その役割から考えると神様はイエス様と共にいた野獣と向き合っていくために天使を遣わし、主を支えていたのではないかと思いました。

私は啄木の妹の存在を知りました。その人間味あるエピソードを垣間見た手紙から偉大な人物の生涯を支えていた存在があったことを覚えたいと思います。そして、私自身も神さまから遣わされた私を支えてくださっているメッセンジャーの存在を覚えて日々過ごしていきたいと思います。(司祭 越山哲也)